

# もう一人のオンディーヌ

—:ジャン・ジロドゥ:オンディーヌ:—

椎名 利(化工会)

安野さんの『オンディーヌ』が、私の記憶の『オンディーヌ』を思い出させました。

私は、この元の説話は知りません。

ジャン・ジロドゥの戯曲『オンディーヌ』です。

1958年劇団四季の設立5周年記念の公演は『ジャン・ジロドゥ:オンディーヌ』だった。

ハンスが北大路欣也、オンディーヌが加賀まりこで、日生劇場で行われた。

## ジャン・ジロドゥ:オンディーヌ

中世のドイツ、森を武者修行で徘徊していた騎士ハンスは、とある湖のそばで漁夫夫婦の宿に泊まる。

夫婦の娘オンディーヌ(15歳?)は、この若者にひとめ惚れするとハンスもこの娘を愛してしまう。

しかし、オンディーヌは水の精で人間と結婚することはできない。悩んだ彼女は水界の王(日下武史)に相談する。王は反対するが彼女の熱意に負けて『ハンスが裏切った時は二人とも命がない』という条件で許す。

ハンスは、勇んで彼女を連れて宮廷に戻る。宮廷では、許嫁の王の娘ベルダはハンスを取り返すべき行動をおこす。本来人間社会になじみの薄いオンディーヌが宮廷のルールなど知るはずもなく、失敗を繰り返し戸惑うハンスはいついにオンディーヌと別れ、ベルダとの結婚に踏み切る。そのため、オンディーヌは身を隠す。

## ラストシーン

ハンスの結婚式の日

オンディーヌは捉えられ、どちらが裏切ったかの裁判にかけられる。

オンディーヌ:「裏切ったのは私です」

ハンスを助けようと「裏切ったのは自分だ」とするが、水界の王が嘘を見破りハンスは死ぬ。

しかし、オンディーヌをさすがに憐れみ、過去の記憶は全てなくさせ生ることを許す。

過去の記憶を失ったオンディーヌは死んだハンスを見ながら…

オンディーヌ：「この人素敵ね。生き返らせないの…」

水界の王：「だめだ」

オンディーヌ：「この人、生きていたらきっと好きになったのに……」

私は結婚した当時、二人ともこの劇団四季にはまってしまい、演目が変わるたびに観に行きました。例えばその一つ、『シラノ・ド・ベルジュラック』は松緑のシラノ、久我美子のロクサーヌで彼女のオレンジ色の衣装が印象的でした。

このような中でもオンディーヌの「生きていれば好きになったのに…」との無邪気なセリフ、素晴らしいラストシーンでした。（2020-4-18）